

寒 気

市川茂子

冬空に出でし下弦の月近く金星は放つ恋のシグナル

方言のブームというも浮かび来ず頭かかえて言葉をさがす

方言を忘れていしが標準語も訛り混じりて年重ねたり

早朝を出で道すがら知る人の一人に会いて言葉を交わす

呼鈴の音かぞえつつコタツより漸く立ちて戸を開けにゆく

木枯しの吹く音やめば静けさに仕舞仕度の思いめぐらす

宿業しゆくごうをかかえながらに年古としふるりてやがて自然に思いを託す

年明けてつづく晴天の初詣で清新な陽を浴びてゆくなり

白梅の匂う朝あしたの路地をゆく鋭い寒気に顔晒しつつ

酉年の幸先の良き思いなり晴天続き大寒に入る